

事業実施の目的 地域の幼保小が架け橋期の育ちへの願いを共有し、架け橋期の教育が質的に向上されることを目的として、就学前施設の状況や幼保小接続の状況など特徴の異なる3つの小学校区において、それぞれの実態に応じたカリキュラムの開発等に取り組み、その実践に必要な研修を推進することで、全市的な広がりを図る。

1. 主な取組内容について

【架け橋期のカリキュラム開発会議】 ○本市における呼称：「京都市架け橋会議」 ○開催頻度：年3回実施
 ○会議の構成メンバー：外部有識者（幼児教育、初等教育の専門家）、小学校長会代表、公立幼稚園長会代表、私立幼稚園等各種就学前施設の関係団体代表、保護者代表、研究ブロック代表、教育委員会（幼小担当部局）、子ども若者はぐみ局（幼保担当部局、以下「子ども局」という。）、こどもみらい館（幼児教育センター）
 ○会議内容：事業概要、各研究ブロックの状況、幼保小の連携・接続に関する研修等の実施状況等の共有。各研究ブロックにおける「架け橋期のカリキュラム」案の検討。

【架け橋期のカリキュラム】

（開発の基本的な考え方） 学校・園のある地域によって、子どもや保護者等の実態も異なることから、地域の実態に合わせた架け橋期のカリキュラムの開発が必要であると考えている。全市的には本研究をふまえ、自立的に開発した参考例を示したい。

（作成状況） 各研究ブロックが、互いの教育の課題と地域の特徴、保護者・子どもの実態に応じた共通の視点を定め、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などを手掛かりに架け橋期のカリキュラムを作成。

（内容） 各研究ブロックの地域の特徴や保護者・子どもの実態に応じ、以下の3パターンのカリキュラムを作成。
 ①思考力やその土台となる人間関係の育ちに視点を置いたもの
 ②学びをつなぐことに視点を置いたもの
 ③安心・安定感を土台に子どもの育ちをつなぐことに視点を置いたもの

（作成方法） ドキュメンテーション、事例検討、具体的な子どもの姿から幼児期と児童期の子どもの育ちの相互理解等を深め、各校園が持つスタートカリキュラムやアプローチカリキュラムを土台に連携窓口担当者が検討を重ね、架け橋期のカリキュラムを作成。

【園・小学校における体制】 ○モデル地域である特徴の異なる3研究ブロックの体制

（幼保小接続担当） 各ブロックの校園で幼保小の連絡窓口担当を決定。主にその担当者が会議に参加するなど研究を進めるための枠組みを作った。

（ブロック会議） 年度初めに年間の活動計画を作成し、年間5～6回のブロック会議が定着。

（会議内容） 架け橋期のカリキュラムの開発を柱に、授業・保育参観と協議等を行い具体的な子どもの姿や教師の援助、環境について話し合う。

（交流状況） 幼保小が遠足で一緒に活動する、生活科の授業に幼保が参加する、学校行事へ幼保を招待する。

【自治体における体制】

（モデル地域の指定） 特徴の異なる3研究ブロックを指定。

（局を超えた連携） 市立小学校と市立幼稚園は教育委員会の所管、その他の就学前施設は子ども局の所管であるが、両局が協力して、架け橋プログラムに取り組んでいる。架け橋会議や本研究協力団体にも、同局との連携から保育園連盟、日本保育協会、私立幼稚園協会の3団体が参加。

（研修） 各課の研修に加え、教育委員会や子ども局、さらには同局所管の幼児教育センターこどもみらい館の連携による本市教員保育者を対象とした研修会を実施。小学校、市立幼稚園には、教育委員会のホームページに架け橋プログラムに特化したコンテンツを作成し、幼保小接続研修会や各ブロックの研究報告等を研修動画として配信。就学前施設には、こどもみらい館から配信。

2. 各ブロックの主な成果について

（幼保小の先生の意識の変化）

○3研究ブロックを対象に教員・保育者の意識調査を実施（3年間継続）
 ・（R4）幼保小教職員間の意識の共通点や差異、幼保小連携・接続に期待することや必要とする研修内容、有効と考える子ども同士の交流等について把握

○相互理解の深化
 ・授業改善のため、積極的に就学前施設や架け橋委員に授業を公開しており、協議を重ね相互理解を図ることで、幼児期の育ちを知ることの重要性を実感する教員が増加。
 ・地域の民間園の前向きな参画があり、保育を公開した園では、公開前に園内で研修をする等、自園の教育を振り返るきっかけとなっている。

（子ども・教員の変容）

○小学校での安心感
 ・1年生の環境を幼保の環境に近づけるとともに、児童が自ら考え取り組む活動を取り入れ、教員が子どもの考えや発言を受容する言葉かけをしたことで、入学直後でも小学校に安心感を持ち、意欲的に活動したり、自ら発言し課題を解決しようとするなどの変化が見られた。

○教員の理解
 ・教員は、「10の姿」が5歳児と1年生の育ちを捉える重要な視点と認識し、具体的にどのような姿なのか理解を深めている。

（相互理解・指導の改善）

・互いの授業・保育参観と事後協議でのコーディネーターからの助言により、教育の質向上のための教師の関わりや教材等について学ぶことができている。
 ・半日入学・入学式・R5年度のスタートカリキュラムの取組でも、子どもたちが安心して主体的に活動し、自ら学ぶ方法を検討、実践している。
 ・施設類型・設置種、校種を越えて授業・保育を公開することは、自校園の教育を振り返り改善するきっかけとなっている。

（例：1年生算数の授業公開及び事後協議で、互いに授業・保育を改善しようとする姿）
 <小教員> 具体物を使ってから抽象物に移行していくと理解が深まることを改めて実感
 <保育者> 1年生でも数詞が使用されることから、小学校の先取りではなく日頃の保育の中で、数詞を意識することの大切さに気づく

事業実施地域・協力園校（R4年度）

【実施地域】 京都市

【協力園校（3つの研究ブロック）】
 幼：公立幼稚園3園、公立保育所1園、私立保育所4園、私立幼稚園2園
 小：公立小学校3校

今後の目標（R5年度）

- ・専任架け橋コーディネーター（新設）による研究ブロック校・実践研究校への支援・助言。
- ・連携・接続の取組を積極的に推進する「実践研究校」を10校程度指定し、実践成果の提示。
- ・全小学校・小中学校への幼保小連携・接続主任設置を目指し、研究・実践を通して主任の役割と成果を明確化。
- ・令和5年度「学校教育の重点」の中に架け橋プログラムの重要性等の提示と、市立幼稚園・小学校の教育指導計画における「園・学校経営方針」での幼保小の連携・接続の具体的な取組の記載。
- ・教職員向け「架け橋通信（仮称）」の年3回配信と、就学前保護者対象のパンフレットの作成・配布による啓発。
- ・7月に架け橋に関わる幼保小の関係教職員対象の合同研修会の充実と就学前保護者対象の講演会の企画・運営。

3つの研究ブロックの架け橋期のカリキュラム（案）の共通の視点及び特徴や工夫した点

【A研究ブロック】大規模な小学校とその地域にある入学者の多い就学前施設3園

〈本ブロックの特徴〉家庭で大切に育てられ、思いやりのある子どもが多い一方、受け身な姿勢も見られ、学力を大切に考える保護者が多い。「地域の子どもは地域で育てる」意識の高い地域である一方、広範囲の就学前施設から入学することもあり、地域とのつながりが薄い家庭が増えてきている。

〈架け橋期カリキュラムへの願い〉スタートカリキュラムを意識した活動を本質的な学びのつながりにつなげていきたい。「主体性」や「思考」を大切に授業や保育をしようと研鑽中。

〈共通の視点〉「目指す子ども像」「子どもたちの経験・遊び/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構想等」「思考力を育む先生の関わり」「思考力を育む環境構成」「子どもとの交流」

〈特徴や工夫した点〉幼保小とも研究主題に明示された「思考力」に着目して、「共通の視点」を作成。「目指す子ども像」では、それぞれ1年間の発達の視点を大きく捉え、作成している。また、思考力を育む教師の関わりや環境構成に着目して、幼保では、小学校での学習の土台となる人間関係の育ちの視点も絡めて作成している。作成の手順としては、幼小の5歳児担任や1年生担任である連携主任が回を重ねて検討したり、幼保同士の管理職や連携主任が話し合い、幼保での言葉の使い方の違いを知り、言葉を選びながら作成している。

【Bブロック】同一敷地内にある小・公立幼・小規模保育施設と地域にある就学前施設3園

〈本ブロックの特徴〉家庭に守られ、素直であるが、自分に対する自信をもてない子どもが多い。保護者は学校に協力的で、幼小の交流・連携の取組にも理解を得ているように感じる。地域には幼小合同の学校運営協議会があり、子どもたちは学校だけでは得られない知識や経験を得ている。

〈架け橋期カリキュラムへの願い〉子どもたちが安心して学校生活を送り、主体的に自己を発揮できるように敷地内の公立幼稚園と協力し、環境整備や指導方法における工夫と改善を行ってきており、全校体制で幼保小接続の意義や目的が教職員に浸透してきている。その取組を地域の他の幼保に広げたい。

〈共通の視点〉「ねらい」「内容」「連携（園または学校・家庭）」「すすんで学ぶ」「楽しくかわる」「自分でできる」（それぞれ児童・教師・環境に分化）「個別の支援」

〈特徴や工夫した点〉同一敷地内の幼小で国立教育政策研究所の「幼小接続」の研究指定を受け、幼小で同一の研究組織を立ち上げ、育てたい3つの資質・能力「探究・ふれあい・誇り」の視点で接続期カリキュラムを作成した経緯があった。互いを知る取組、特に幼児の遊びや発達の姿、教師の援助を小学校教育に生かそうと小学校教員の姿が変容し、入学当初の子どもが安心して登校し、主体的に自己を発揮するようになっていた。その研究を核として、地域の就学前施設3園とともに架け橋期のカリキュラムを作成するにあたり、3つの視点をわかりやすい言葉（「すすんで学ぶ」「楽しくかわる」「自分でできる」）に変更して作成した。研究時に「9年間の学びをつなぐ」視点で作成した3つの視点の発達の姿を架け橋期のカリキュラムに示し、発達のつながりを表している。また、幼保のカリキュラムには「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して記載している。さらに、幼稚園も小学校も1年間を大きく3期ずつに分け、それぞれの期の発達を意識しながら、実際の活動で見られる姿や教師の関わり、環境のポイントが示されている。

【Cブロック】中規模小学校とその地域にある公立幼稚園と公営保育所

〈本ブロックの特徴〉長年にわたり、交流、連携がなされ、子どもにも教職員にもつながりがある。家庭事情が厳しい子どももおり、教職員は一人一人の親子に丁寧に柔軟に関わっている。保護者は学校、園所に喜んで通うことで概ね満足しており、学校、園所への要望は少ない。地域のつながりが薄く、幼保小が主体となり、地域の取組が進められてきた。

〈架け橋期カリキュラムへの願い〉スタートカリキュラムの取組は進めてきているが、幼保小間の十分な共通理解ができておらず、教育課程の接続が課題である。

〈共通の視点〉「望ましい発達の姿」「園で展開される活動/小学校の生活科を中心とした各教科等の単元構成」「安心・安定感を土台にした「つながり」「主体性」（それぞれ『幼児・児童』、『援助・支援』に分化）「連携」（『家庭』『幼保小』に分化）「個別の支援」

〈特徴や工夫した点〉小学校区に公立幼稚園と公営保育所がある数少ない地域で、長年の交流が息づいており、連携には具体的な活動が示されるなど、安心・安定感を土台に子どもの育ちをつなぐカリキュラムになっている。「望ましい発達の姿」では、それぞれ1年間を大きく3期に分け、発達のつながりを示している。また、園での活動や小学校の単元構成で書かれている活動には幼保小ともに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識して記載しており、幼保小が子どもを見る際の共有の視点としている。地域の特性や保護者の実態から、「家庭との連携」が必須項目であり、丁寧に記載されている。

参考例として、架け橋期のカリキュラム（案）を京都市総合教育センターのスマートポータル（公立幼小向け）及びこどもみらい館（就学前施設向け）のホームページに掲載。2年次は、幼保小の連携事業や具体的なドキュメンテーション、実践事例を通して、検証・改善を図りたい。